

| | |
|------------------|---|
| Title | 岸野久著, 『西欧人の日本発見 : ザビエル来日前日本情報の研究』 |
| Sub Title | Hisashi Kishino, Seiyo-jin no Nihon hakken, Tokyo, 1989 |
| Author | 浅見, 雅一 (Asami, Masakazu) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1991 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.60, No.4 (1991. 7) ,p.183(587)- 189(593) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910700-0183 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

岸野 久著

『西欧人の日本発見——ザビエル来日前
日本情報の研究——』

浅見 雅一

一

日本におけるキリシタン史の研究は、未刊の教会文書の利用によって、近年飛躍的に進歩したが、フランシスコ・ザビエルを中心とする初期の日本布教については、この分野の中では、比較的研究が立ち遅れた状態となっていた。ザビエルについては、ゲオルク・シュルハンマー師による、『フランシスコ・ザビエル——彼の生涯とその時代——』全四巻 Georg Schurhammer, *Franz Xaver——Sein Leben und seine Zeit*, 4 vols. Freiburg, 1955-73. という大部の伝記があり、日本における従来のザビエル研究は、この部分的紹介に止まるものが多かった。しかし、現在では日本人による二つの優れたザビエル研究を見ることができ、河野純徳師は、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』（平凡社、一九八五年）として、シュルハンマー師とヨゼフ・ヴィッキ師が校訂したザビエルの書簡集 *Georgius Schurhammer et Iosephus Wicki ed., Epistolae S. Francisci*

Xaverii aliisque eius scripta, 2 vols. Romae. 1944-45. を翻訳され、それを基に『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』（平凡社、一九八八年）というザビエルの伝記を著された。河野師による一連の研究と、岸野氏による本書とによって、日本におけるザビエル研究は本格化したと言つて過言ではない。

本書は、『西欧人の日本発見』とされてはいるが、内容はむしろ、副題の「ザビエル来日前 日本情報の研究」の方に、よく表われている。西欧人の来日以前の日本情報を網羅的に紹介しているわけではなく、ザビエルが来日以前に得た日本情報の研究が中心となっている。

二

本書は未発表の論文六本を含む十二章から成り、各章は一本の論文に相当する。巻末には、複写史料として、本文中に翻訳が紹介されている文書史料の写真複写が付されている。本文には、十二章が、取り上げられた史料の年代順に、一律に配列されているが、その内容から三部に分けることが可能である。以下、便宜的に、第一章と第二章を第一部、第三章から第九章迄を第二部、第十章から第十三章迄を第三部として、その内容を紹介し、若干の検討を加えることにする。

第一部は、ポルトガルにおける初期の日本情報について取り上げたものである。

「第一章 ポルトガル語版『マルコ・パウロ』（一五〇二年刊）とシパンゴ情報」は、マルコ・ポーロ『東方見聞録』のポ

ルトガル語版『マルコ・パウロ』(一五〇二年刊)に見えるジパング情報は、ポルトガル語で記された初めての日本情報として、ポルトガル人の日本指向に決定的とも言える影響を与えたことを論じ、併せて、ポルトガル語版『マルコ・パウロ』第三巻のジパング情報の全文を、翻訳して紹介したものである。ポルトガル人の日本指向が十六世紀以降と意外に新しいということ、ここから知ることができる。

「第二章 エスカランテの日本情報——フレイタスとディエスの琉球・日本情報——」は、岡本良知氏が疑義を表されたディエスの来日は、岡本氏が指摘される点においては来日否定の根拠にはなり得ないことを明らかにし、ポルトガル人による琉球発見が一五四二年であり、日本発見が一五四三年であるとす、シュルハンマー師の説を再確認したうえで、ディエゴ・デ・フレイタスとペロ・ディエスからガルシア・デ・エスカランテ・アルバラドが得た日本情報を、各々翻訳して紹介したものである。

ここでは、ザビエルの日本情報という点においては、ザビエルがエスカランテから日本情報を得ていることが前提となる。シヤムにおいて、ザビエルはエスカランテと会っている筈であるとされているが、岸野氏も述べておられる様に、これはシュルハンマー師が出典を挙げずに述べられたことに依拠している。当時、シヤムにおいて、ザビエルとエスカランテが会っている可能性は極めて高いとは考えられるが、この点が否定された場合、ザビエル来日前の日本情報という点での第二部との関

連性は希薄になってしまう。

ポルトガル人による日本発見の年代比定に関して、岡本良知氏は、『十六世紀日欧交通史の研究』(六甲書房、一九四二年)において、エスカランテ報告の他に、メンデス・ピント『遍歴記』Mendes Pinto, *Peregrinação* を用いて考察されている。岸野氏が強い影響を受けていると思われるシュルハンマー師も、『フェルナン・メンデス・ピントとその『遍歴記』』*Fernão Mendes Pinto und seine "Peregrinação"*, Bibliotheca Instituti Historici S. I. vol. XXI, Orientalia, Roma, 1963. において、この書誌学的研究を行なっている。岡本氏もピントの著作の信憑性を必ずしも高いとされてはいいないが、シュルハンマー師は、「一五四三年のポルトガル人による日本発見」*O descobrimento do Japão pelos Portugueses no anno de 1543*, *ibid.* において、これを完全に退けられている。この点において、岸野氏はシュルハンマー師の見解を踏襲しているものと考えられるが、特に説明はされていない。岡本氏の頃とは事情は異なり、今日ではピントの著作は、邦訳もなされているので(岡村多希子訳『東洋遍歴記』三冊(一九七九〜八〇年、平凡社))、史料価値を低いと見做した以上、敢えて説明する筈もないと考えられたのであろうが、著名な史料であるだけに、何らかの説明を加えた方が良かったのではないかと思われる。

三

第二部は、日本人乃至来日経験のある者を通じて、ザビエル

が来日前に得た日本情報の研究であり、本書の中心部分をなしている。

「第三章 ポルトガル・エルヴァス市立図書館所蔵『インド・日本の諸事に関する書』について」は、「はしがき」でも述べられている日本情報に関する文書群を、アデリーノ・デ・アルメイダ・カラード氏の研究に沿って紹介したものである。この文書群には、次章以下で紹介されている、ジョルジェ・アルヴァレスとニコラオ・ランチロットの日本情報が、各々含まれている。

「第四章 ジョルジェ・アルヴァレスと日本情報（一五四七年）」は、マラッカで日本人アンジロウをザビエルに紹介したジョルジェ・アルヴァレスが、ザビエルの依頼で纏めた日本情報の成立に関する考察を行ない、併せて、その全文を翻訳して紹介したものである。これは、来日経験のある者が著した最初の日本情報である。同姓同名の者が多い「ジョルジェ・アルヴァレス」の特定を行なった後、原本が失われたアルヴァレスの日本情報の写本や翻訳が紹介されている。

ここでは、来日経験のあるアルヴァレスの日本情報における、アンジロウの存在が指摘されている。琉球情報よりも日本情報の方が優先されており、その内容は具体性を帯びてきている。

「第五章 フワン・ロペス・デ・ベラスコ編『新大陸地誌総記』と日本記事」は、ベラスコ編『新大陸地誌総記』における日本記事が、アルヴァレスの日本情報を基にして著されたことを立証し、併せて、同書の日本及び琉球記事を翻訳して紹介し

たものである。

その結論部から、本章は、アルヴァレスの日本情報がベラスコの著作に利用されることによって、スペイン人に如何なる影響を与えたかを考察するための基礎作業であることが推測される。すると、第二部の性質を考慮するならば、他の章と同様の独立した章として捉えるよりは、むしろ第四章の補論と見做すべきものである。スペインにおいて、機密文書として扱われたベラスコの著作の影響を考慮に入れるのであれば、同様に、ポルトガルにおいて、機密文書として扱われた、十六世紀初頭の琉球・日本記事を含む、トメ・ピレス『東洋総記』*Tome Pires, Suma Oriental que trata do Maar Roxo ate os Chins*（生田滋他訳『東方諸国記』〔一九六六年、岩波書店〕）を、第一部において取り上げても良かったのではないかと思う。

以下、第六章から第九章迄は、ランチロットの日本情報の研究である。

「第六章 ニコラオ・ランチロットと日本情報（一五四八年）」は、アンジロウを通じて、ランチロットが纏めた日本情報の紹介である。「第一日本情報」の第一稿と「第二日本情報」は、既に、カラード氏によって翻刻されているが、岸野氏はその誤りを正したうえで翻訳されている。本書刊行後に出版された、東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原文編之一』（東京大学出版会、一九九〇年）に収録されているのは、「第一日本情報」の第一稿と「第二日本情報」のみである。「第一日本情報」の第二稿は、シュルハンマー師

によってドイツ語に訳され、紹介されているが、原文翻刻や邦訳はない。従って、「第一日本情報」の第一稿から第三稿迄と「第二日本情報」とを、体系的に研究紹介したのは本書が初めてであり、現在までのところ本書以外にはない。「第一日本情報」は第一稿から第三稿迄、一見したところ類似した内容であるが、岸野氏はその差異に着目し、丹念に検討されている。先ず、内容の分類がなされ、書誌について触れられたうえで、全文が翻訳され紹介されている。

「第一日本情報」については、第一稿はエルヴァス市立図書館所蔵のポルトガル語訳写本を、第二稿はローマ・イエズス会文書館所蔵のイタリア語写本を、第三稿はイタリア中央図書館所蔵のイタリア語原本を、各々テキストとされている。「第二日本情報」はエルヴァス市立図書館所蔵のポルトガル語訳写本が、紹介されている。

「第七章 ニコロオ・ランチロット編『第一日本情報第一稿』の諸写本の系統について」は、シュルハンマー師によって作成された、ランチロット編「第一日本情報第一稿」の写本の系統図を綿密に再考証し、その誤りを訂正したものである。

「第八章 ニコロオ・ランチロット編『第一日本情報第三稿』の特色について」は、「第一日本情報」の第二稿と第三稿との異同を検討したものである。第三稿はランチロットにしてみれば日本情報の決定版と言えるものであったが、ランチロットの作為が入りすぎたために、ザビエルはこれを改悪と見做して第二稿を利用した、と結論付けられている。このため、第二

稿に限って、原本のみが伝わり、写本が存在しないという。

「第九章 一五四八年『日本情報』と編者ニコラオ・ランチロットの役割」は、ランチロットの日本情報において、アンジロウの言葉に対するランチロットの解釈が、如何なる形で加えられているかを検証したものである。従来、口述者アンジロウの存在ばかりが強調されてきたのに対して、編者ランチロットの存在に焦点が当てられている。この点において、第八章とは表裏一体をなすものである。

第二部は、第五章を除いて、ザビエルの日本認識の姿勢と方法を追究したものであり、シュルハンマー師の書誌学的研究を再構築した極めて完成度の高い研究である。

四

第三部は、ザビエルが来日前に得た日本情報が、日本布教において如何なる役割を果たしたかということを考察したものである。

「第十章 フランシスコ・ザビエルの『大日』使用について」は、ザビエルが、デウスの訳語として「大日」を用いたこととの意義について、論じたものである。布教の失敗を齎した、ザビエルの「大日」使用は、従来、アンジロウの無知によるところが大きいとされてきた。第六章で紹介された、ランチロット編「第一日本情報第二稿」のローマ・イエズス会文書館所蔵のイタリア語版と、原本からのザビエルの手になるスペイン語訳とを対比することによって、ランチロットが日本の宗教をキ

リスト教の概念で説明しようとしていたのに対し、ザビエルはこれに慎重であったことが明らかにされている。

それにも拘らず、ザビエルが敢えて「大日」を使用したのは、「この『大日』をキイワードとして、日本の宗教を知る手がかりとしようとした」(二〇三頁)からであり、事実これによって布教はある程度の成果を挙げた、と積極的に評価できる面もあることが指摘されている。この様に、「大日」使用から原語使用への転換を単に布教上の失敗とは捉えず、日本の宗教理解という点から段階的に見るといふ視点は、従来は全くなかったのではないかと思われる。自らの「大日」使用を最終的には否定しなければならなくなり、いわば自己矛盾とも思える状態に陥ったザビエルではあったが、時間経過に従って捉えると、その判断は必ずしも不適切ではなかったことが、ここでは示されている。この意味において、本章は従来の固定的かつ消極的評価に疑問を提示したものであると言える。

しかし、本章の結論部において、「現在日本においてデウスは『神』と宛てられているが、『神』という言葉はカミガミのカミと混同されやすく、現に混同されており、デウスを表わす言葉として必ずしも最適なものとは言えない。従ってアンジロウが宛てた『大日』も、今日使用している『神』も五十歩百歩と言えよう。デウスⅡ『大日』にみられる試行錯誤は聖書の翻訳にみるように、現在もなお継続中である。」(二〇七頁)として、今日の翻訳用語の問題と比較するのは極論であろう。同時に見れば矛盾することも、時間的前提が異なれば成立する、という

岸野氏がここで適用された考え方も矛盾する。なぜならば、

「大日」は固有名詞でしかないのに対して、今日われわれは「神」を一神教の場合にも、多神教の場合にも用いられる普通名詞と認識しているからである。従って、今日使われている「神」という言葉が、ある種の混乱を招くことがあるとしても、ザビエルの「大日」使用と同一次元で論じることはできない。ザビエルの「大日」使用の問題点は、期せずして一神教を本地垂迹の観点から説明してしまったということであろう。これを単なる訳語の問題に帰着させてしまうと、問題を矮小化させてしまうことになる。

現地の宗教用語の使用の問題は、次の第十一章とも、基本的には関連してくる。

「第十一章 フランシスコ・ザビエルとギョーム・ポステルの異文化理解について——ニコラオ・ランチロット編『日本情報』の利用を通して——」は、ザビエルと共にパリで学んだギョーム・ポステルとザビエルとの異文化理解を、ランチロット編「日本情報」のポステルによるフランス語訳とザビエルによるスペイン語訳とを対比することによって、宗教の問題を中心に論じたものである。ここでは、キリスト教世界の存在を異文化の中に見出そうとするポステルと、非キリスト教世界の存在を認めようとするザビエルとの違いが浮き彫りにされている。ザビエルは非キリスト教世界の存在を認めていたことが論じられているが、これは布教という発想が成立する前提であろうと考えられる。これに対して、ポステルは異文化の中にキリス

ト教の潜在を認めていたことが論じられているが、「大日」使用の発想は、むしろポステルに近いのではないかと思われる。

尚、本章は、ポステルが、ランチロット編「第一日本情報第二稿」のイタリア語写本を用いたという前提がなければ、成立しないのではないかと思われる。ザビエルの日本布教の問題とは直接の関係はないので、第十一章も第六章と同様、補論と見做されるべきものであろう。

「第十二章 一五四九年一月五日付鹿兒島発フランススコ・ザビエル書翰の日本情報とその影響」においては、来日して約三カ月後に書かれたザビエルの大書翰は、アルヴァレスやランチロットの日本情報に、ザビエルが日本で得た情報を集大成したものであり、教会文書であったために、ポルトガルの国家機密に属していることでも情報統制を受けずに、十六世紀のヨーロッパに日本を正確に伝える情報源となったものであることが、明らかにされている。

岸野氏の研究は、ザビエルが来日前に得た日本情報の書誌学的研究であるが、その方法は、往々にして、遡及ではなく拡散という形で進められている。即ち、より原本に近い良質な写本の特定がなされたうえで、その書誌学的「影響」(II 拡散)が論じられているのである。方法は極めて緻密であるが、そこでは議論は成立し難い。ランチロットの日本情報については、第七章から第九章迄の写本系統の研究は、ザビエルによる利用という観点において一貫しているが、第一章、第五章、第十一章、第十二章は、ヨーロッパへの「影響」(II 拡散)が考慮に

入れられていることもあり、ザビエルの日本布教の問題に、必ずしも集約されているわけではない。第二部でなされた日本情報書の書誌学的研究の意味を十分に引き出すためにも、日本布教への「影響」(II 応用乃至適用)という形で、第三部を更に発展させた方が良かったのではないかと思われる。そうすれば、第一章の意味も、より明確になったのではないだろうか。或いは、岸野氏は別の形で纏めることを考えておられるのかもしれないが、本書において論じて頂きたかったと思う。

ところで、ザビエルが得た日本情報については、本書により十分納得できるが、中国情報についてはどうであったのかという疑問が生じる。岸野氏の研究にはこの疑問に答えたものがあるので、併せて紹介したい。

岸野氏は、ザビエル関係以外の論文も数多く発表されているが、本書に収録されなかったザビエル関係の論文に、「フランススコ・ザビエルのシナ China 情報と布教構想」(『キリシタ研究』二三、一九八三年)と、「フランシスコ・ザビエルの日本開教とインド総督ガルシア・デ・サア」(『桐朋学園大学短期大学部紀要』七、一九八八年)とがある。前者は、ザビエルの中国布教構想は短期間に形成されたわけではなく、一五四五年に聖トマス中国布教伝説を聞いた後、六年間もかけて形成されたことを明らかにしたうえで、本書第二章と同じくエスカランテが記したペロ・ディエスの中国情報とアフォソン・ジェンテイルの中国情報とを、各々翻訳して紹介したものである。ザビエルの中国布教構想の原型は来日以前から存在していたと

する、その内容から判断すると、本書の第三部に収録することも適当であつたのではないかと思われる論文である。後者は、ザビエルの日本布教はポルトガルの国家権力と無関係ではなく、ザビエル自身も日本布教を国家事業の一環に組み込もうとしていたことを、インド総督ガルシア・デ・サアとの関係を通じて、明らかにしたものである。

五

本書は、極めて良質で難解な史料の翻訳紹介が中心となっている。それが如何に困難なことであるかは、複写資料として巻末に付された、本書に引用された文書の写真を見れば一目瞭然である。本書が優れたザビエル研究であることは、疑う余地がない。しかし、キリシタン史、とりわけザビエル研究を専門とする研究者以外には、本書は容易には利用し難いのではないかと思われる。なぜならば、本書で取り上げられた日本情報は、ザビエル研究という本書の性質からザビエルが来日前に得たものに限定されているうえ、こうした日本情報の、同時代の日本の史料としての史料価値については、論じられてはいないからである。

各章は、簡潔にして要を得ており、極めて短い。冗長さを避けるためであろうと思われるが、この事も却って読む側の理解を困難にしている。史料や内容の取捨選択には、岸野氏の判断基準があるものと思われるが、煩雑かつ困難な作業であると推測される取捨選択の過程は、必ずしも明示されているわけでは

ない。そのため、読む側は、一定の操作の後の整理された結論を、突き付けられる形になってしまっている。キリシタン史を専攻されている岸野氏にとっての「常識」が、必ずしも読む側にとつての「常識」になっているわけではないということは、この傾向を一層拡大しているのではないかと思われる。以上、優れたザビエル研究である本書が、ひとりでも多くの人に読まれて利用されることを希うが故に、浅学をも省みず敢えて述べてきた。未熟者故の誤解もあるのではないかと危惧している。岸野氏の御海容を願う次第である。

(吉川弘文館、一九八九年十月、二四二頁〔資料七九頁〕)

定価五八〇〇円〔本体五六三一円〕